

「神の国はあなた方の只中に」

ルカ 17:20-21

2020. 5. 3 南与力町教会朝拝

I. 神の国はいつ来るのか——神の国が見えてこない現実の中で

今日の箇所は二節だけの短い箇所です。しかし「神の国」について大切なことが教えられています。

ファリサイ派の人々がイエス様に一つの質問をしました。

「神の国はいつ来るのか」と。

イエス様は「神の国」の福音を宣べ伝えていかれました（ルカ 4:43、7:20、8:1等）。「神の国、神のご支配」というものを「良き知らせ、喜びの知らせ」として宣べ伝えていかれたのです。ファリサイ派の人々もそのことを知っていたでしょう。だからイエス様にあなたが宣べ伝えている「神の国」はいつ来るのか、と尋ねたのだと思います。

ファリサイ派の人々は福音書においてしばしばイエス様の敵として出てきます。質問をする際も、イエスを試そうとしたり、陥れようとする魂胆がある場合があります（ルカ 10:25等）。しかし、今日のところには特にそのような悪い魂胆があったということは記されていません。ただ「神の国はいつ来るのか」と尋ねたのです。それは彼らにとって純粋な疑問だったのかもしれませんが。ファリサイ派の人々は人一倍熱心に律法を研究し、それを守ろうとした人々です。人々からは特別に信仰深い、敬虔な人たちと思われていました。そういう彼らはやはり「神の国」に関心があったのではないのでしょうか。「神の国が来る」のを待ち望んでいたのかもしれませんが。当時イスラエルはローマ帝国の支配下にありました。神の選ばれた民と自負しているユダヤ人にとって異邦人に支配されているということは屈辱的なことでした。事実、紀元六年にはローマ帝国の支配に対してガリラヤのユダという人が中心になって反乱を起こしたこともありました（使徒 5:37）。そういう状況の中で、ファリサイ派の人々も、そのようなローマ帝国の支配を打ち破り、イスラエルのために国を再建してくれるような「神の国が来る」のを期待し、待っていたのではないのでしょうか（使徒 1:6）。そのような中でイエス様に「神の国はいつ来るのか」と尋ねたと想像することができます。またこの質問の背後には、イエスは「神の国」を宣べ伝えているが、その「神の国」は一向にやって来そうにないではないか、という批判めいた思いもあったかもしれません。

私たちもまた「主の祈り」の中で「御国を来たせたまえ」と祈っています。神の国の到来を待ち望んでいます。それは逆に言うなら、神の国はまだ来ていない、ということでもあります。この世界にはなお多くの苦しみ、悲惨な状況があります。特に今私たちは世界を襲っているコロナウイルスという災い・試練の中にあります。「コロナウイルスに負けない」という言葉も聞かれますが、なかなか終息が見通せないという現実もあります。いつまでこのような状況が続くのか、この先どうなっていくのかという不安や恐れが私たちを襲います。教会も例外ではなく、礼拝するため会堂に集えない日々が続いています。「一体、いつまでなのか。いつ終わるのか」。それが私たちの切実な問いかもしれません。またコロナウイルス以外のことでも私たちは日々の生活の中で苦しみ、悩むことがあります。早くこのような状況から解放されたい、と思うこともあるでしょう。そしてそのような現実の中で私たちは「御国を来たせたまえ」と祈ります。人間の力ではどうしようもない状況を前にして、「神の国、神の御力に

よるご支配」が来ますようにと私たちは祈ります。しかしすぐに状況が改善されるとは限りません。そのような中で「一体いつ神の国は来るのか」という問いは、私たちにとっても切実なものではないでしょうか。

Ⅱ. イエス様の答え

①神の国の現在性と未来性

この問いに対するイエス様の答えは次のようなものでした。

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

イエス様は「神の国はいつ来るのか」という質問に直接答えることをなさらず、まず「神の国は、見える形では来ない」と言われました。これは私たちにとって意外に思われるかもしれません。私たちは「御国を来たせたまえ」と祈りながら、神の国がやがてははっきり見える形で到来することを祈り願っているところがあるのではないのでしょうか。それは間違っただけなのでしょうか。

私たちはまずこのイエス様の答えがファリサイ派の人々に語られたということを考慮に入れる必要があります。そしてイエス様は今日の箇所（ルカ 21:1-36）のすぐ後の 22 節から、今度は「弟子たち」に向かって語り始められます。そしてそこでは 17 章 24 節にあるように「稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れる」と言われています。すなわち人の子であるイエス様は皆にはっきりと分かるような仕方で現れる、ということをおっしゃっているのです。イエス・キリストが再び来られ、その時に神の国が完成する、完全な形で神の国が到来する、そのように信じることは間違っただけではありません。むしろイエス様ご自身が弟子たちに教えておられることであり（ルカ 21:31）、新約聖書の他の箇所でも教えられています（I コリ 15:23-28）。では「神の国」はただ未来にのみ到来するものなのかというと、実はそうではないのです。イエス様が 21 節の最後で「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と言われたように、神の国は現在すでに存在しているものでもあるのです。神の国は将来到来するものであると同時に、現在すでに存在しているものでもあります。神の国は「すでに」来ている面と「いまだ」来ていない面、現在と未来、両方の側面があるのです。そしてファリサイ派の人々は「神の国」をただ将来到来するものと考え、「現在存在している」とは考えなかったのです。だからこそ、イエス様は彼らには、神の国が現在すでに存在していることを強調して語られたのだと思われるのです。

②神の国は見える形（観察できる仕方）では来ない

そして「神の国は、見える形では来ない」という言葉ですが、「見える形」と訳されている言葉は元々「観察」を意味する言葉が使われています。すなわち、イエス様は「神の国は、観察できるような仕方では来ない」と言われたのです。逆に言うと、ファリサイ派の人々は神の国は観察できるような仕方で来ると考えていた、ということです。具体的にどんなことを考えていたのでしょうか。天変地異が起こる、天からのしるしがある、ということを考えていたかもしれません（ルカ 11:16）。あるいはイエス様がこの時エルサレムに上っていた（17:11）ことを考えると、メシアが神の都であるエルサレムで王座に着くこと（ルカ 19:11 参照）、そして、ローマ帝国の支配を打ち破り、イスラエルの国を建て直

し、治めるようになること（使徒1：6）を考えていたかもしれませんが、そしてそういう神の国は一体いつ来るのかと批判を込めて尋ねたのかもしれませんが、しかし、イエス様は「神の国は見える形、観察されるような仕方では来ない」と言われて、その根本にある考え方を否定されたのです。

さらにイエス様は『『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない』とおっしゃっています。じっと観察することによって神の国は「ここにある」あるいは「あそこにある」と指をさして言えるようなものではない、ということです。

実際、イエス様は神の都であるエルサレムに行って、王座に着かれたでしょうか。そうではありませんでした。イエス様が見つかったのは、王座ではなく、十字架でした。あのダビデのように、エルサレムの王座に座り、外国の敵を滅ぼし、イスラエル民族のための国を打ち建てられたわけではありませんでした。そのような「神の国」が見える仕方、観察できる仕方、エルサレムから始まったわけではなかった。人々の期待通りにはいかなかったのです。しかしイエス様ご自身は予め「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない』と言っておられました。

私たちが生きる現代においても、神の国は「ここにある」、「あそこにある」と特定の場所を指して言うことはできません。キリスト教国と言われる「アメリカ」は自らを「神の国」のように見なしたことがあるようですが、決して「アメリカ」＝「神の国」ではありません。日本もかつて神道的な意味で自らを「神国（神の国）日本」と考えましたが、当然それは聖書が語る「神の国」とは全く違います。今、世界中を見渡し、観察しても「ここに神の国がある」、「あそこにある」というようなことは言えません。それはイエス様が「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない』と言われた通りです。神の国は観察して見つけようとしてもできません。では神の国はどこにもないのでしょうか。あるとすれば、それはどこにあるのでしょうか。

③見よ、神の国はあなた方の只中にある！

・二つの解釈——イエス・キリストにおける神のご支配

イエス様は21節の最後で言われました。

「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

ここで「あなたがたの間に」に訳されています言葉は、「～の内に、中に」という意味の言葉（ギリシャ語のエントス）が使われています。そしてこの言葉の解釈として大きく分けて二つあります。一つは、これを「あなたがたの内面」つまり「心の中」という意味に解釈することです。「神の国は見える形では来ない、ここにある、あそこにある、とすることはできない。神の国はあなた方の心の中にある」。これは筋が通っていますし、実際歴史の中でこのような解釈はしばしばされてきたようです。しかし現在ではあまり人気がありません。第一の理由は、福音書の他の箇所において「神の国」がそのような内面的、精神的な事柄としてはどこにも述べられていないということです。第二に、ここでイエス様が「あなたがた」と呼びかけているのは、弟子たちではなく、ファリサイ派の人々だということです。もしイエス様を信じている弟子たちであったなら、その心の中に神の国は存在している、と考えることもできるでしょう。しかし、イエス様のことを信じていないファリサイ派の人々の心の内に神の国がある、と言うのは無理があります。

そこで今日では第二の解釈が優勢となっています。それは新共同訳が訳しているように、この言葉を

「あなたがたの間に」と取る解釈です。新改訳や口語訳では「あなたがたのただ中にある」と訳されています。神の国が「あなた方の心の内にある」ということではなく、「あなた方の間にある、あなたがたの只中にある」、そのように解釈するのです。そしてそれは福音書の他の箇所が示しているように、イエス・キリストにおいて神の国、神の支配は始まっている、到来しているということと一致しています。例えばルカ 11 章 20 節でイエス様は次のようにおっしゃっていました。

「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。」

イエス・キリストは神の指、神の力で、悪霊を追い出し、サタンの支配下にあった人を解放されたのです。そうであるならば、神の国、神のご支配はすでにあなたたちのところに来ているとイエス様はおっしゃいました。それと同様に、たとえファリサイ派の人々がイエス様を信じていなかったとしても、イエス・キリストがもたらした神の支配、神の統治は「あなた方の只中にある、あなた方の間に確かに存在している」。イエス様はそのことを宣言し、その事実気づくよう促しておられるのです。

・目に見えない神の国を信じる—その祝福を受け取るために

神の国をもたらしたイエス・キリストが、確かにこの時ファリサイ派の人々の間におられました。彼らの只中にいたのです。しかし、今私たちは自分の目でイエス・キリストを見ることはできません。またイエス様がなされた病人のいやし等の奇跡を直接見ることもできません。イエス・キリストは十字架の死から復活し、天に昇られました。ではイエス・キリストが天に上げられたのと同時に、神の国も私たちから遠く去ってしまったのでしょうか。神の国はもうわたしたちの只中にはないのでしょうか。そうではありません。先ほど見たようにイエス様はおっしゃっていました。

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。」

この言葉を語られた時、イエス様は「見える姿」で存在しておられました。イエス様がなされた病人のいやしも見る事ができました。観察する事ができました。それなのになぜ、イエス様は「神の国は、見える形では来ない、観察されるような仕方では来ない」と言われたのでしょうか。それはイエス様の病人のいやしなどの御業は確かに神の国が到来したことの「しるし」でしたが、「神の国」そのものではなかったからでしょう。病人がいやされたとしても、そこで神が働いておられる、神の国が来ているという霊的な現実には、目には見えません。実際、イエス様が悪霊を追い出し、それによって口の利けなかった人が話し出した時、それを見たある人々——マタイによればファリサイ派の人々ですが（マタイ 12:24）——彼らはこう言ったのです。

「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」（ルカ 11:15）。

彼らはイエス様の奇跡を見ても、そこで神様が働いておられる、神の国が来ている、とは思いませんでした。むしろ、イエスは悪霊の親玉の力で悪霊を追い出しているのだ、と悪口を言ったのです。イエス様がなされた奇跡がいかにもすばらしいものであっても、「神の国」そのもの、神が生きて働いておられるという現実そのものは、目には見えないのです。じっと観察すればわかるというものではありません。それはただ信仰によってのみ悟ることができるのです。

イエス様がもたらした神の国、神のご支配の本質は、病人のいやしそのものというよりも、イエス様が語っておられるように、サタンに支配され、縛られていた人が神様によって解放され、救い出されることです。そしてそれはイエス様が今日の箇所のすぐ前の 17 章 19 節で「あなたの信仰があなたを救っ

た」と言われた出来事でもあります。イエス様がこの言葉を語った相手は、重い皮膚病をいやされ、そのことでイエス様に感謝し、神様をほめたたえたサマリア人でした。彼は自分の重い皮膚病がいやされた時、「やったーうれしー」と喜んで終わりではありませんでした。イエス様を通して神様が自分に働いてくださったことを彼は見て取ったのです。それはつまり、イエス様を通して「神の国が来た」ことを彼は信じた、ということです。だからこそ、このサマリア人は、神様をほめたたえ、感謝するために、イエス様のもとに戻ってきたのでした。その彼にイエス様は「あなたの信仰があなたを救った」と言われました。

重い皮膚病がいやされること、清められること自体は目に見える現象です。しかしそこで神が働いておられるということ、そこに神の国が到来しているという現実、目には見えません。科学の実験のように観察によって証明できることではないのです。それはただ信じることができるだけです。信仰によってのみ見ることができる、とも言えるでしょう。そしてそれを信じるなら、その信仰によって私たちは救われます。目には見えなくとも、イエス・キリストを通して神が今ここで働いておられる、私たちをご支配し、守り、導いてくださっている。そのことを信じるなら、私たちも神の国の祝福をいただけるです。

「神の国はあなた方の間にある、只中にある」。ここ使われているギリシャ語は「あなた方の手の届く範囲にある」という意味合いもあるようです。私たちは、神の国をどこか遠い将来に、あるいは遠い場所に捜し求める必要はありません。それは私たちの只中に、私たちの手の届く範囲にあるのです。私たちが信仰の手を伸ばすなら、差し出すなら、神の国の祝福を受け取れるのです。神の国の恵み、平和、救いにあずかることができます。

結論：

「灯台下暗し」ということわざがあります。私たちは探し物をしていて、それが実は自分のすぐそばにあったり、自分が身に着けていたとしても、人から言われるまで気づかないということがあるかもしれません。「神の国」もいつ来るのか、どこにあるのかと、自分の外側ばかりを観察して探そうとしても見つけることはできません。それは今ここに、私たちの只中にあるものだからです。イエス様は私たちがそのことに気づき、神の国を信じ、その祝福にあずかるように招いてくださっています。イエス・キリストを通してもたらされた神の恵みのご支配に目を向け、信頼し、身を委ねつつ歩んでまいりましょう。

祈り

私たちの主イエス・キリストの父なる神様。私たちの生きる現実には厳しいものがあります。苦しみがあり、悲しみがあり、悲惨な状況があります。あなたの御国はいつくるのか、どこにあるのかと、私たちが問わざるを得ません。しかし、主よ、あなたは「神の国はあなた方の只中にある」と教えてくださいました。どうぞ私たちの心の目を開き、私たちの只中にあるあなたの御国、あなたの恵み深いご支配に目を向けることができるようにしてください。どのような状況にあっても、そのあなたのご支配、守りと導きに信頼し、身を委ねつつ、日々歩いていくことができますように。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。